

# 地域研究

## ―ヒスパニック問題研究の一視点

加藤 薫

地域研究センターでは、従来おし進めていた国際的な研究組織ネットワーク作業の第一、第二フェーズを遂行し、具体的な研究プロジェクトを稼働させる第三フェーズに取り組む時期に入った。この間ラテンアメリカ地域文化研究の面では藤田富雄教授が「カシケ・トゥピー・ウンバンダ教会」(国際経営フォーラム 第一号、一九九〇)にひき続きカンドンブレ、カルデシズモ、ヴードゥー教など新宗教組織に関する研究を発表(世界「宗教」総覧、新人物往来社、一九九三)するなど成果を挙げているが今回は地域研究センター研究活動のうち、核となるヒスパニック問題研究ユニットの活動報告を重点的に述べる。<sup>\*1</sup>

まずヒスパニックあるいはラティーノ(ラティーナ)

と呼ばれる人達の文化に対する関心が高まってきているという状況がある<sup>2</sup>のだが、この理由としては、まず最近の課題としてNAFTAの締結のような経済環境の変化に伴う対メキシコ、およびアメリカ合衆国内部におけるメキシコ系移民およびその子孫を中心とするラテンアメリカ系住民の政治経済的文化的役割の見直しが必要なることが挙げられる。またソビエト連邦の崩壊による冷戦構造の消滅から、新たな対ラテンアメリカ政策の策定が必要とあり、その中で従来アメリカ合衆国と他の一国というバイ・ラテラルな関係で捉えていればよかったラテンアメリカ諸国との関係も、自国内にすでにかかえている、あるいはこれからかかえるであろう移民との関係も含め、ラス・アメリカスという複数形でのマルチ・ラテ

ラルな発想で検討してゆかねばならない事態に至って、  
 することも挙げられる。国内問題に限っていてもすでに  
 二千六百万人近くになると言われるヒスパニック系住民  
 の存在は教育水準の低下、犯罪、貧困、などの問題と密  
 接にかかわっており、国家の掲げる理想とかアイデン  
 ティティーに対する根底的な問題を投げかけている。

文化的にみれば、ヒスパニック系住民の増大に伴う、  
 文化の「クレオール主義」<sup>3</sup>の進展が、これまで維持し  
 てきた倫理観、価値観への重大な挑戦とみるか、これも  
 アメリカ合衆国の歴史からみればここまでくるとは予期  
 しなかったけれども当然起り得ることで建国の理想か  
 ら逸脱した状況ではないと受容するか、といった問題を  
 アメリカ合衆国内の非ヒスパニック系住民に提起してい  
 る。いずれにせよ階級差が歴然としており、社会のマ  
 ジョリティーとマイノリティーの色分けが明確であった  
 時代は、アングロサクソンの行動規範や価値観への  
 「同化」を拒否する姿勢も単に無知や教育の遅れと理解  
 していればよかったのだが、現在のようにならばこの意志  
 として表明され、最もアングロアメリカ的なアイデン  
 ティティーを形成していくに重要な教育制度から社会の  
 運用構造部分まで根本的に揺り動かす存在になっている  
 現状では、相当社会全体を苛立たせていることも事実だ  
 ろう。大衆文化レベル、とりわけ若い世代ではヒスパ

ニック的なものの引用がファッションナブルなものど捉え  
 られており、黒人のヒップ・ポップと同様、既成秩序へ  
 の反抗の格好い表明の方法として定着した感がある。  
 文化の支配者に対する被支配者の抵抗の歴史という点で  
 見ればラテンアメリカの経験は長じており、それだけに  
 したたかである。アングロアメリカ文化がクリオール  
 文化に反発する立場をとるにせよ、いやアメリカ合衆国  
 は建国時から文化クリオール主義的であったと容認する  
 立場をとるにせよ、ヒスパニック問題の提起する課題は  
 避けて通れない状況に至っている。

ヒスパニック系住民は現在まで一貫してアメリカ合衆  
 国のマイノリティーという位置付けをなされてきた。こ  
 のため同じくマイノリティー・グループとして存在して  
 きた非白人系のグループ、すなわち黒人、あるいはアフ  
 ロ・アメリカンや日系人、他のアジア系移民やネイティ  
 ブ・アメリカンと呼ばれる先住民族との共通課題を抱え  
 ており、事実一九五〇年代後半から六〇年代の公民権運  
 動においては共闘して成果を上げてきた。しかしこう  
 いった政治社会的な共通の問題意識は現在でも維持され  
 ているにせよ、文化の面から考えると、八〇年代から九  
 〇年代に明らかにしてきたのは個々のマイノリティー  
 ・グループ固有のヒストリシティ<sup>4</sup>での違いであり、エ  
 スニックな要素の違いから必ずしも共通感覚を持ち得な

いし、その必要もない、というまさに文化の差異の認識である。ここからヒスパニック系の問題もまた単にアメリカ合衆国内に存在する人種問題のひとつとしてだけでなく世界に広範囲に存在するエスニティー問題のひとつとして理解しなければならなくなった。但し、このことがヒスパニック問題研究をより困難で複雑な地平に追いやるといふことではない。逆にこれまで、主にこれも政治的理由と偏見から接点の見出せなかったラテンアメリカ研究と、アメリカ研究あるいはヒスパニック研究のバイブリッドなアプローチが可能になり、例えば拡大された地域研究のひとつとして認知される余地がうまれつつあるということである。

ここで改めて人為的な国境線に従って研究範囲や研究者のジャンル分けをすることの無意味さを痛感するわけだが、同時に研究者にもより広範囲かつ深い知識とデータの蓄積が求められている。例えば言語ひとつとりあげても、英語と最低スペイン語の能力は基本で、それにクオリティ化した独特の言語に精通していなければならぬ、という問題がある。最も文献調査を行うだけならば出版物のほとんどが今のところ英語のものに限られており、二次資料であってもマイナーな分野であったため、研究者も英語圏としてのアメリカ合衆国の問題として捉えていてもそれほど支障はなかったという過去の経過が

ある。しかしこのことがヒスパニック問題研究の位置付けをあいまいにしてきたとも言える。筆者の調査したカリフォルニア州の大学図書館においても、文献類をエスニック問題研究部門に整理しているところもあれば、移民部門に整理しているところ、民俗学や人類学部門に整理しているところもある。地域研究別になっているところでは北米研究部門に整理しているところもあれば、ラテンアメリカ部門に整理しているところもある。当然ながらこれら分類方法の違いはまた大学での研究体制や教育カリキュラムの違いの反映でもある。ちなみにLASA (Latin American Studies Association) においてもその重要性が認識されヒスパニック研究部門は近年拡大の一途にあるが、やはりLASA活動全体のなかでの位置付けにあいまいさを感じるのは筆者だけだろうか。

一九九二年度から一九九三年度に実施した短期間ながら計三回実施したカリフォルニア州現地調査の目的は、ヒスパニック系住民のうち、特にチカノと呼ばれるメキシコ系アメリカ人のダイナミックな動態の把握と、日本においてはまだ僅少かしかない文献、および映像資料の検索にあたった。主要なテーマは、このチカノ社会という限定された対象内においてへすでに存在すると考えられる文化的アイデンティティと、へこれから創造し

ていかねばならない。文化的アイデンティティーの間にどのような継続性と差異があり、また同質性と異質性をそれぞれについてどのように、どの範囲まで許容し、どこから拒否されるのか、それはどのような外部環境との相克から生じるのか、という点にあった。これはまた世代間のパーセプション・ギャップの問題も含むし、収入や教育程度、職業、社会環境による差異の問題も当然ある。

具体的な方法論やアプローチの仕方、インフォーマントの選定、指標の設定、今後の指針などを含め、いずれ詳細な報告にまとめなければいけないのだが、今回は経過報告ということで調査の概略と簡単な印象をまとめる。まず調査の拠点をカリフォルニア州サンディエゴ市においた。その理由としては、メキシコとの国境にきわめて近く、アクセスの面で国境を往復しての調査が容易であったこと、都市規模がそれほど大きくなく調査対象への移動が容易なこと、古くからチカノの存在があり、異なる世代への調査が容易なこと、文化のクレオール化現象を把握するに格好のモデルを参照できるのではないかと想定できたこと、などが挙げられる。ただ難点をいえば、メキシコ国境にあまりに近く、チカノ系住民が多いことから、より包括的なヒスパニック像（当然ヒスパニック系住民といってもそのなかにまたマジョリティーとマノリティーが存在し、チカノは明らかにマジョリ

ティーである）がえがきにくいことであろう。しかしこの問題は拠点をどこに置くにせよその地域の特性が反映されるため、将来研究ネットワークの拡大が可能ならばバランスの問題は是正されると予測する。

以下調査において接触のあった研究教育機関、および文化活動支援組織のリストと概略を述べる。調査の範囲はサンディエゴ市のみにとどまらない。

(一) サンディエゴ州立大学 (SDSU)

人文学部でエスニック問題を扱っており、チカノやヒスパニック問題を扱うコースも多いが基本的には学部教育に重点を置く。そもそも教職員学生にヒスパニック系の人が多く、キャンパス・アイデンティティーや運動部の俗称にもメキシコのシンボルや名称が扱われている位であり、大学自体がエスニック社会を形成している。

(二) カリフォルニア大学サンディエゴ校 (UCSD)

社会科学系学部で扱っている。研究活動の中心はU.S. - Mexican Studies) にあり、一九カ国におよぶ国々からの研究者を受け入れている。移民問題においてはラテンアメリカ日系人の日本出稼ぎの実態なども研究対象とされている。

(三) ラ・ラサ文化センター

サンディエゴ市初のチカノ研究センターとして発足。

しかし最近では多様化するエスニック・グループの存在と問題に対応すべくアジア系やネイティブ・アメリカン・グループとの共生をテーマとした活動に規模を拡大しようとしている。草の根レベルからの知識普及活動と文化アイデンティティーの研究に熱心で、*ラ・フロンテラ*（ザ・ボーダー：国境地帯）文化の創造というコンセプトを打ち出している。

(四) ニ〇ノ二〇 スタジ奥斯

サンディエゴ市ヒスパニック系アーティストおよびラテンアメリカ出身者の活動拠点として美術ギャラリー、音楽スタジオ、文学サロンなどを建物内に持つ外、活発な文化プロモーション活動を行い、国境を越えてメキシコとの、また州外の文化人との交流が盛ん。エスニシティの拡大から最近では日系人・日本人音楽家やアジア系美術作家との接触が増えている。

(五) カフェ・ドゥ・シネ

チカノ系映画監督アイザック・アルテンステインの経営するミニ・シアター・サロンだが、サンディエゴ市在住の知識人同士、また全米に広がるヒスパニック系組織個人の交流の場としてあり、コンピュータのデータベースには個人、組織がネットワークされた形で登録されており、アクセスや相互通信が可能になっている。

(六) カリフォルニア州立大学ロスアンジェルズ校 (UCLA)

ワイト・ギャラリー

五年間の準備の後、全米で開催されたCARRA (Chicano Art: Resistance and Affirmation) 展<sup>4</sup>の組織母体で、全米中のチカノ組織、施設、個人のデータベースを所有している。特にフィルム関係資料には貴重なものが多い。

(七) カリフォルニア州立大学チカノ問題研究リソースセンター

エスニック問題研究教育組織として独立した組織になっており、月刊誌  *Aztlan*  を発行するなどロスアンジェルズ地区で活発な活動を行っている。独立した図書館も持っており、通信ネットワークを通じてのコンピュータによる蔵書検索も可能。

(八) テアトロ・カンペシーノ

六〇年代からのチカノ運動の指導者だったルイス・バルデス主宰組織で特に演劇、映画の分野での知識普及、啓蒙、支援活動の中心。労働者、小中学校向け教育資料なども作成、提供している。労働組合活動、公害対策活動など市民運動と密接で映像記録などビデオフィルムの形で市販している。

(九) シネ・アクション

サン・フランシスコで活動する若手映像作成グループで商業ベースに乗らないドキュメンタリーなど制作する

他、映画業界に興味持つチカノ系若者のための仕事幹旋、職業訓練など行っている。

(一〇) クルトウラ・クラッシュ

カリフォルニア州を中心としたチカノ系運送業者団体が支援する文化団体で労働運動関連の資料の収集を行ったりドキュメンタリーフィルム製作を行う。

(一一) カリフォルニア州立大学バークレー校

もともと日系人研究など昔からエスニック問題関連の実績のあるところでチカノ問題に関する研究教育体制は高水準にある。ロスアンジェルズに比べると社会環境の違いが、アカデミック志向が強いように思われた。

ヒスパニック問題研究ユニットの今後の課題としては、現在カリフォルニア州とメキシコに限られたネットワークの輪を、より包括的なヒスパニック研究が可能となるように拡大するつもりであり、すでにニューメキシコ大学、テキサス大学オーステン校、ヒューストン大学、トゥレーン大学、フロリダ大学など南西部諸州の研究教育機関とのコンタクトをとっている。それと同時にラテンアメリカ研究ユニットの調査活動ともリンクさせ、プエルトリコ、ジャマイカ、キューバ、ドミニカ共和国といったヒスパニック問題と関連の深いラテンアメリカ諸国の調査が可能になるよう統合する方向を考

ている。

(かとう・かおる／経営学部教授)

(注)

1. 地域研究センターの組織、活動の概略についてはすでに「経営フォーラム」第二号、一九九一、で詳しく述べている。

2. Hispanic, Latino (f. latina) の用語はともにその発生から現在までの使用のされかたに歴史的背景がある。詳しくは Shorris, Earl "Latinos: A Biography of the people", Norton & Co. Inc. New York, London, 1992. の前書き部分 XV 以下の頁を参照。

本稿で英語の「ヒスパニック」を採用した理由は矢張りアメリカ合衆国の問題として捉えておきたい意向があるからである。

3. 詳しくは今福龍太「クレオール主義」、青土社、一九九一など。クレオール主義的視点からのさまざまな事例が季刊誌「談」、TASC 出版物、No. 6 (一九九一)、47 (一九九二)、48 (一九九二)、49 (一九九三) で特集されている。

4. 詳しくは加藤薫、「チカノ・アートの現在」、国際経営論集、No. 4、一九九三収録一五三―一八八頁、を参照。